

# 冗談に怒りを感じた場面における聞き手の 反応を規定する要因の検討

——拒否に対する感受性, 話し手との関係性, 周囲の反応に着目して——

葉山大地\* 櫻井茂男\*\*

本研究の目的は, 友人から冗談を言われて怒りを感じる場面での聞き手の反応を規定する要因を, パーソナリティ要因 (拒否に対する感受性) と状況要因 (話し手との親密さ, 冗談に対する周囲の友人の反応) の観点から検討することである。聞き手の反応には「迎合的反応」, 「回避的反応」, 「感情表出反応」が含まれる。本研究では場面想定法を使用し, 大学生 417 名 (男性 169 名, 女性 247 名, 性別不明 1 名) を 4 つの状況 (たとえば, 「親友が話し手であり, 周囲の友人は冗談に対して笑っている」) のうちのひとつに割り当て, その状況において冗談に対してどのように反応するかを回答するよう求めた。分散分析の結果, 拒否に対する感受性が高い回答者は, 親友が話し手で, かつ周囲の友人が笑っていない状況において, 迎合的な反応を行わないと評定することが示された。しかしながら, 拒否に対する感受性が高い回答者は, 周囲の友人が笑っている場合は, 迎合的な反応をする頻度を高く見積もっている。この結果は, 拒否に対する感受性が高い回答者は, 状況によって拒否される可能性を考慮し, 自己防衛的な反応を選択していることを示唆している。

キーワード: 冗談に対する反応, 拒否に対する感受性, 怒り感情, 感情表出

## 問題と目的

日常生活において, 我々はしばしば友人と冗談(joke)を言い合うが, 近年, 聞き手が冗談に怒りを感じるという現象も報告されているように (Lampert & Ervin-Tripp, 2006; 葉山・櫻井, 2008), 冗談は常にうまく伝わるという訳ではない。聞き手が冗談に怒りを感じてしまうのは, 冗談で笑わせようという話し手の親和的意図が聞き手に伝わらず, 話し手の意図が敵意的に解釈されてしまうためであると論じられる (Kruger, Gordon, & Kuban, 2006)。

上記のような冗談の失敗によって, 友人との関係の悪化や, 冗談に対する物理的報復といった, さらなる二次的な対人的問題が引き起こされる可能性が考えられる。冗談の失敗による二次的な問題の発生を避けるためには, 話し手は親和的意図をきちんと聞き手に伝えられるよう工夫をするだけでなく, 聞き手の怒り感情を解釈 (decoding) し, 話し手の親和的意図の説明を

したり, 場合によっては, 謝罪したりする等の適切な対処を行うことが必要である。

聞き手の感情を解釈する際に, もっとも重要な手がかりとなるのは, 冗談に対する聞き手の反応である。たとえば, 児童のからかい (teasing) に関する研究では, 親や教師がいじめを早期発見するための手がかりとして, からかいの受け手の反応が重要視されている。(Laudau, Milich, Harris, & Larson, 2001; Scambler, Harris, & Milich, 1998)。Laudau et al. (2001) は, 「無視する」, 「敵意的に反応する」, 「ユーモラスに反応する」という反応を取り上げ, 児童がからかいに対して反応するという内容のビデオを視聴させる実験を行った。その結果, 無視やユーモラスな反応を視聴した児童や教師は, ビデオの児童が感じている怒りの程度を低く見積もることを示した。

聞き手の反応の重要性は, 児童期におけるいじめの早期発見に限ったものではない。友人関係において, 冗談の聞き手が怒りを感じた際に, どのようなパーソナリティをもつ個人が, どのような状況で, どのような反応を選択するかを心理学的に明らかにすることは, 適切な対人関係を築く上で重要な情報となるであろう。なぜなら, こうした情報を念頭に置いて対人コミュニケーションを行うことで, 冗談の行きすぎによって生

\* 筑波大学大学院人間総合科学研究科  
〒300-1221 茨城県つくば市天王台 1-1-1  
dhayama@human.tsukuba.ac.jp

\*\* 筑波大学大学院人間総合科学研究科  
ssakurai@human.tsukuba.ac.jp

起した聞き手の怒り感情を解釈することが容易になると考えられるためである。その意味で、対人的問題を避けるための重要な知見であるといえるだろう。そこで、本研究では、冗談を言われて怒りを感じる場面における聞き手の反応を規定する要因をパーソナリティ要因と状況要因の観点から検討することとする。

本研究では、Laudau et al. (2001) を参考にして、聞き手の反応として「迎合的反応」、「感情表出反応」、「回避的反応」を取り上げる。迎合的反応とは、「怒り感情を表出せずに相手の期待に合わせた望ましい応答をする反応」を指す。また感情表出反応とは、「冗談に対して感じた怒り感情を相手に伝える反応」を指す。回避的反応とは、「冗談に対して応答せずに曖昧に振舞う反応」を指す。なお、回避的反応は、明確な意思表示を避ける点で、迎合的反応と感情表出反応の中間に位置すると考えられる。

これらの冗談に対する聞き手の反応は、心理学においては、主として感情表出 (emotional expressivity) の制御として位置づけることが可能だろう。感情表出の制御とは、「社会的場面において感情をそのまま表さず、強めたり、弱めたり、他の感情に置き換えたりして、本来とは異なる形に表すこと」と定義される (崔・新井, 1998, 1999)。また、親密な関係での感情表出の抑制として、自己沈黙 (self-silencing) が挙げられる (Jack, 1991)。自己沈黙とは、親密な相手との関係を失ったり、葛藤を避けるために自分の意見や感情を抑制することを指す (Jack, 1991)。先行研究により、感情表出を規定する要因として、シャイネス (崔・新井, 2000) や特性的な表出性 (Gross & John, 1997)、拒否に対する感受性 (Harper, Dickson, & Welsh, 2006) などのパーソナリティ要因や、私的・公的場面 (中村, 1994) や話し手との関係性 (木野, 2000) などの状況要因が検討されている。

それでは、怒りを感じる冗談に対する聞き手の反応を規定するパーソナリティ要因や状況要因としてどのようなものが挙げられるだろうか。本研究で取り上げる要因に関して、以下に説明を行う。まず、パーソナリティ要因に関しては、拒否に対する感受性 (Rejection Sensitivity) を取り上げることにする。

**拒否に対する感受性** 拒否に対する感受性 (以下、拒否感受性と略記する) とは、「拒否される可能性のある状況で、拒否されるのではないかと案じるような傾向。言い換えれば、拒否されることを予期しやすく、拒否されることに対して大げさに振舞う傾向」と定義される (Downey & Feldman, 1996; 本多・桜井, 2000)。すなわち、拒否感受性が高い個人は、拒否感受性が低い個人より

も、拒否されるかが曖昧な場面をより拒否されやすいと解釈する特徴を有するのである。

さらに、Downey & Feldman (1996) は、拒否感受性の高い個人は他者からの拒否を避けるということに最大の価値を置き、状況に合わせて、自己防衛的な反応 (self-protective reaction) を行うと論じている。この点に関して、Downey, Freitas, Michaelis, & Khouri (1998) は自己防衛的な反応のひとつとして、自己沈黙を挙げており、Harper et al. (2006) は、拒否感受性が自己沈黙を促進することを実証的に示した。

Gross (2001) は、感情制御を一連のプロセスと捉えたモデルを提案し、感情喚起の手がかりの評価 (evaluation of emotion cue) を感情制御の開始にかかわるプロセスとして位置づけているが (Gross & John, 2003)、拒否感受性は、感情制御のこの部分と密接に関係していると考えられる。特に、拒否感受性は、他者に対する感情表出との関連が実証的に検討されている点から (Harper et al., 2006)、本研究においても有効な変数であると判断される。

次に、状況要因として、(1) 話し手との関係性、(2) 冗談に対する周囲の友人の反応、を取り上げる。

**話し手との関係性の要因** 感情表出に関する先行研究において、親密度の高い相手であるほど感情表出しやすいことが示されている (木野, 2000; 吉田・高井, 2008)。ユーモアに関する研究からも、冗談への反応における関係性の重要性が示唆されている。たとえば、話し手の冗談に楽しんでいる振りをする行動は、「ユーモアセンスを共有している」ことを相手に伝える自己呈示行動であると論じられる (Martin, 2007)。

Ickes & Duck (2000) は、親友のような親密な関係では、あまり重要でない関係よりも積極的で意図的な印象操作が行われなことを指摘しており、冗談への反応を自己呈示として捉えるのであれば、話し手との関係性に左右される可能性がある。

以上より、本研究では、話し手との関係性の要因として「親友・そこそこ親しい友人<sup>1</sup>」という変数を用いて、親しさの程度を操作する。

**冗談に対する周囲の友人の反応** 近年、井上 (2008) は、感情の隠蔽・擬態を行う理由として他者の存在を挙げ、周りにいる人の雰囲気、自分が感じている感

<sup>1</sup> 本研究においては、心理学を専攻する大学生3名と討議を行い、中間的な親しさを表現する用語として「そこそこ親しい」を採用することとした。なお、広辞苑 (新村, 1998) においては、「ほどほど」と同意語とされ、少ないが満足できる程度を指す。

情と一致しない場合において、感情の隠蔽・擬態が起こる頻度が多くなることを示している。一般的な会話場面において、その場に話し手以外の第三者が存在することも多い。こうした点を考慮すると、周囲の他者の反応を考慮することも感情表出の変化を詳細に捉える上で非常に重要であると考えられる。

冗談に関連する周囲の反応としては、周囲にいる人々の笑いが挙げられるだろう。周囲の人々の反応の重要性は、ユーモア研究においてしばしば取り上げられる。たとえば、他の人と笑いを共有することは、気が合うかを確かめる方法 (Ziv, 1984) であり、社会的な同意としての笑いが起こることが指摘されている。さらに実証的な研究として、Chapman (1973) や Martin & Gray (1996) は、実験参加者の周囲に笑っている人が存在していたり、他者の笑い声を聞いている場合、呈示刺激に対して実験参加者の笑いが増加するという社会的促進が起こることを明らかにしている。

以上より、周囲の友人の反応として「周囲の友人が冗談に笑っている・笑っていない」という変数を取り上げ、操作する。

上記の議論を踏まえ、本研究の目的は以下の2点とする。1点目は、冗談に対する反応に関する項目を作成し、迎合的反応、回避的反応、感情表出反応という各反応の関係を検討することである。その際、迎合的反応と感情表出反応は負の相関関係を示し、回避的反応は他の反応と無相関であると想定される。

2点目は、冗談を言われて怒りを感じる場面における聞き手の反応に関して、先行研究と同様に場面想定法 (たとえば、木野, 2000) を用い、パーソナリティ要因と状況要因の効果を検討することである。その際、本研究では特に、パーソナリティ要因と状況要因の相互作用に着目する。なぜならば、行動の一貫性に関する議論において、個人の行動はパーソナリティ特性だけではなく状況の影響を受け、変化することが指摘されているためである (Mischel, 1968 訛摩訳 1992)。こうしたアプローチは発展を続け、現在、相互作用モデル (Endler & Magnusson, 1976) や新相互作用論 (Krahe, 1992 堀毛訳 1996) と呼ばれている。このアプローチでは、特定の状況に対してどのような心理的な意味づけをするかが、その状況における行動の基本的な規定因であるとされる (Endler & Magnusson, 1976)。前述したように、拒否感受性は、曖昧な状況を拒否的に解釈しやすいという特徴が理論的に想定できるため、状況の意味づけに関連する変数として有効であると考えられる。目的の2点目に関連する仮説を以下に述べる。

**本研究における予測** 操作変数の主効果に関する予測を以下に述べる。まず、周囲の友人の反応の効果に関しては、井上 (2008) や Martin (2007) の知見に基づくくと、冗談を言われて怒りを感じた際に周囲が笑っている場合、感情表出反応はその場の雰囲気気を崩す可能性があるため、聞き手は怒り感情を隠して作り笑いをすることが考えられる。以上より、「周囲が笑っている場合は笑っていない場合よりも、迎合的反応を行う (仮説1)」と予測する。同様に、感情表出反応に関しては「周囲が笑っている場合は笑っていない場合よりも、感情表出反応は行わない (仮説2)」と予測する。

次に、関係性の効果に関しては、吉田・高井 (2008) や Ickes & Duck (2000) の知見を基にすると、友人から冗談を言われて怒りを感じた際、話し手と親しいほど明確な意思表示が可能であり、自己呈示をする必要性が低下すると考えられるため、「そこそこ親しい友人よりも親友に対して感情表出反応を行う (仮説3)」と予測する。同様に、迎合的反応に関しては、「そこそこ親しい友人よりも親友に対して迎合的反応は少ない (仮説4)」と予測する。

さらに、拒否感受性を含めたより詳細な予測としては、自己防衛的な反応の観点から行う。すなわち、仮説3として「そこそこ親しい友人よりも親友に対して感情表出反応を行う」という予測を行ったが、Downey & Feldman (1996) や Harper et al. (2006) の知見に基づくくと、拒否感受性の高い個人は、周囲の友人が笑っている場合において怒り感情を表出することは周囲から逸脱すると解釈し、拒否をされる危険性が高いと意味づける可能性がある。そのため、周囲の友人が笑っている状況においては周囲から逸脱することを避けるため、自己防衛的な反応を行うと予想される。こうした点から、拒否感受性が低い個人は、要因の主効果に従うため、主効果のみが見られると予測される一方、拒否感受性が高い個人は主効果だけではなく、相互作用が見られることが予測される。具体的には、「拒否感受性の高い個人は、周囲の人が笑っている場合は、話し手が親友であってもそこそこ親しい友人であっても、迎合的反応をする程度は変わらないが、笑っていない場合は、そこそこ親しい友人よりも親友に対して迎合的反応を行わない (仮説5)」と予測することが可能であろう。同様に、感情表出反応に関して、「拒否感受性の高い個人は、周囲の人が笑っている場合は、話し手が親友であってもそこそこ親しい友人であっても、感情表出反応をする程度は変わらないが、笑っていない場合は、そこそこ親しい友人よりも親友に対して感情表

Table 1 本研究で想定した冗談に怒りを感じた4つの状況

話し手との 関係性	周囲の友人の 反応	教示文
そこそこ 親しい友人	笑っている	友人5, 6人で話している時に, その中の一人である <u>そこそこ親しい友人</u> があなたに対して嫌な冗談を言いました。あなたは <u>その冗談に対して怒りを感じましたが, 周りはその冗談に対して笑っています</u> 。このような場合, あなたはその冗談に対してどう反応すると思いますか。
親友	笑っている	友人5, 6人で話している時に, その中の一人である <u>親友</u> があなたに対して嫌な冗談を言いました。あなたは <u>その冗談に対して怒りを感じましたが, 周りはその冗談に対して笑っています</u> 。このような場合, あなたはその冗談に対してどう反応すると思いますか。
そこそこ 親しい友人	笑っていない	友人5, 6人で話している時に, その中の一人である <u>そこそこ親しい友人</u> があなたに対して嫌な冗談を言いました。あなたは <u>その冗談に対して怒りを感じました。周りの友人もその冗談に顔を見合わせたりして, 反応に困った様子を示しています</u> 。このような場合, あなたはその冗談に対してどう反応すると思いますか。
親友	笑っていない	友人5, 6人で話している時に, その中の一人である <u>親友</u> があなたに対して嫌な冗談を言いました。あなたは <u>その冗談に対して怒りを感じました。周りの友人もその冗談に顔を見合わせたりして, 反応に困った様子を示しています</u> 。このような場合, あなたはその冗談に対してどう反応すると思いますか。

出反応を行う(仮説6)」と予測する。

なお, 回避的反応は先行研究において論じられることが少なく, 先行研究に基づく仮説の生成が難しい。また, 回避的反応は明確な意思表示を避けるという性質を有するが, 状況や個人によっては, 意思表示を避けることがある種の意思表示と評価される場合がある。この点を考慮すると, 一定の性質を前提とした理論的な予測を行うことが困難である。そこで, 本研究では仮説は立てず, 探索的な分析を行うこととする。

## 方 法

**調査対象** 大学生417名(男性169名, 女性247名, 性別不明1名)を対象とした。平均年齢は20.61歳( $SD=2.21$ , 年齢不明6名)であった。

### 質問内容

**拒否感受性尺度** Downey & Feldman (1996) の作成した尺度を基に, 本多・桜井 (2000) が日本人にとって不適切な状況を修正した尺度である。この尺度は15個の場面からなり<sup>2</sup>, (a)各場面で, 受容あるいは拒否されるという結果をどれくらい心配に思うか, (b)相手から拒否される可能性はどの程度だと思えるのか, をそれぞれ評定してもらおう。評定は(a)に対しては「全く心配でない」(1点)から「非常に心配である」(6点)の6件法で, (b)に対しては「必ず断られる」(1点)から「必ず受け入れられる」(6点)までの6件法で, (a)の得点と(b)

<sup>2</sup> 本多・桜井 (2000) の尺度は16場面から構成されるが, 「友人は今晚別の友人と出かける予定があるのだが, 彼(彼女)と一緒に過ごしたいと伝える」という項目は, 多義的な意味に解釈が可能であるため, 除外した。

の得点を掛け合わせた得点を尺度得点とする。

**特定の状況における冗談に対する反応** 冗談に対する反応に関する10項目を独自に作成した。迎合的反応として「笑いながら, 相手の冗談に乗ってあげる」, 等の3項目を作成した。回避的反応として「聞き流して相手にしない」等の3項目を作成した。また, 感情表出反応として「冗談がつまらないと相手に言う」等の4項目を作成した。回答ラベルは, 特定の状況を想定して回答を求める形式のため, 「全くしないと思う(1点)」, 「あまりしないと思う(2点)」, 「時々すると思う(3点)」, 「よくすると思う(4点)」, 「非常によくすると思う(5点)」の5件法に設定した。なお, 回答者1人につきランダムで1つだけ以下の状況についての教示文を割り振り, エピソードへの回答を求めた。

**エピソード文の設定** 各状況における冗談に対する反応の変化を検討するため, 話し手との関係性(そこそこ親しい友人・親友), 周囲の友人の冗談に対する反応(周囲の友人が笑っている・笑っていない)を基に4つの状況に関するエピソードを作成した(Table 1)。

**手続き** 講義の終了後に, 学生の理解を得て実施した。回答に有した時間は20分程であった。

## 結 果

**冗談に対する反応の因子構造の検討** 本研究で作成した10項目を基に, 主因子法(promax回転)による因子分析を行った( $n=417$ )。単独因子に.40以上の負荷をすることを基準としたところ, 3因子構造となった(Table 2)。その際, 「話題を変える」という項目がどの因子にも負荷しなかったため, 分析から除外した。第

Table 2 冗談に対する反応の因子パターン表

項目	因子		
	1	2	3
<b>第1因子 感情表出反応</b>			
冗談によって嫌な気分になったことを伝える	.83	-.01	-.08
冗談がつまらないと相手に言う	.75	.10	.06
冗談に対して怒りを顔に出して伝える	.66	-.03	.09
冗談に対して真剣に言い返す	.54	-.13	-.01
<b>第2因子 迎合的反応</b>			
笑いながら、相手の冗談に乗ってあげる	.12	.84	-.11
愛想笑いをして楽しんでいる振りをする	-.11	.70	.02
相手の冗談を軽く返して傷ついた気持ちを隠す	-.07	.67	.11
<b>第3因子 回避的反応</b>			
聞き流して相手にしない	.00	-.06	.79
聞こえない振りをする	.04	.06	.77
因子間相関			
	1	2	3
	第1因子	-.43	.23
	第2因子		-.07

1 因子は「冗談によって嫌な気分になったことを伝える」、等の項目が高い負荷を示したため、「感情表出反応」と命名した。第2因子は、「愛想笑いをして楽しんでいる振りをする」、等の項目が高い負荷を示したため、「迎合的反応」と命名した。第3因子は、「聞こえない振りをする」等の項目が高い負荷を示したため、「回避的反応」と命名した。各因子に負荷した項目を用いた  $\alpha$  係数はそれぞれ.76～.80であった (Table 3)。

**冗談に対する反応間の関係** 各反応の相関を算出した結果、感情表出反応と迎合的反応の間に、有意な負の相関 ( $r=-.37$ ) がみられた。また、感情表出反応と回避的反応の間に、有意な正の相関 ( $r=.20$ ) がみられた。

**拒否感受性の因子構造の確認** 本多・桜井 (2000) の作成した拒否感受性尺度の一次元性を確認するため、1 因子モデルを想定した確認的因子分析を行った (AMOS5.0 を使用)。その結果、適合度指標は、GFI = .90, AGFI = .87, RMSEA = .07 となり、十分な値を示し

た。以上より、一次元性が確認されたと判断した。また、15 項目を用いた  $\alpha$  係数は.91 となり、十分に高い内的一貫性が示された。

**拒否感受性における群分け** 拒否感受性の群分けに関して、本研究では、平均値を基準として低群 (224 名)、高群 (193 名) に群分けした。拒否感受性の低・高群の得点差を比較した結果、低群 ( $M=10.84, SD=2.41$ ) より高群 ( $M=17.33, SD=3.11$ ) の方が、有意に得点が高かった ( $t(1,415)=23.51$ )。効果量は、 $d=2.33$  であった。

拒否感受性の低群と高群において、それぞれ冗談に対する反応の因子分析 (主因子法, promax 回転) を行った結果、因子構造はどちらも同様に 3 因子構造であった。さらに、冗談に対する反応の関係が、群間で相違があるかどうかを検討するために、両群において各下位尺度間の相関をそれぞれ算出した。その結果、因子構造はどちらも同様であったが、拒否感受性の低群では回避的反応と感情表出反応の相関は中程度の正の相関 ( $r=.30$ ) を示す一方、拒否感受性高群では、無相関 ( $r=.09$ ) であった。

### 冗談に対する反応の変化

各反応についてそれぞれ拒否感受性の程度 (低群・高群) × 話し手との関係性 (親友・そこそこ親しい友人) × 周囲の友人の反応 (笑っている・笑っていない) の 3 要因の分散分析を行った<sup>3</sup>。分析結果を順に述べる。

**迎合的反応** 迎合的反応の得点を従属変数として、3 要因分散分析を行った結果 (Table 4)、2 次の交互作

Table 3 冗談に対する反応の下位尺度間相関と  $\alpha$  係数

	$\alpha$	①	②	③
①迎合的反応	.80	—	-.08	-.46**
②回避的反応	.78	-.06	—	.09
③感情表出反応	.76	-.30**	.30**	—

注) \*\* $p < .01$

注) 上段部は拒否感受性高群、下段部は低群の結果を示す。

<sup>3</sup> 状況要因に関しては、一人につき 1 つだけエピソード文を呈示しているため、分析は被験者間要因による分散分析を行った。

Table 4 冗談に対する各反応の平均値 (SD) および 3 要因分散分析の結果

		笑っている	笑っていない	主効果	一次交互作用	二次交互作用
<b>【迎合的反応】</b>						
拒否感受性 低群	親友	3.32(0.83)	2.95(0.85)	周囲の友人 の反応 $F=18.64^{**}$	関係性×周囲の 友人の反応 $F=6.43^{**}$	$F=3.98^*$
	そこそこの友人	3.10(1.00)	2.83(0.97)			
拒否感受性 高群	親友	3.46(0.78)	2.58(0.99)			
	そこそこの友人	3.15(0.93)	3.08(0.99)			
<b>【回避的反応】</b>						
拒否感受性 低群	親友	2.41(0.92)	2.75(1.04)	n.s.	関係性×拒否 感受性 $F=6.49^*$	n.s.
	そこそこの友人	2.31(0.88)	2.32(0.91)			
拒否感受性 高群	親友	2.26(1.01)	2.39(1.13)			
	そこそこの友人	2.64(1.13)	2.51(1.04)			
<b>【感情表出反応】</b>						
拒否感受性 低群	親友	2.09(0.78)	2.64(0.93)	周囲の友人 の反応 $F=17.65^{**}$	n.s.	n.s.
	そこそこの友人	1.95(0.81)	2.35(0.81)			
拒否感受性 高群	親友	2.15(0.81)	2.55(0.84)			
	そこそこの友人	2.06(0.78)	2.10(0.85)			

注) \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$  注) 下位検定の結果については、本文に記載している。

用がみられた ( $F(1,409)=3.98, p<.05$ )。

次に、各要因間の交互作用をより詳細に分析するために、拒否感受性の要因の水準ごとに、話し手との関係性(親友・そこそこ親しい友人)×周囲の友人の反応(笑っている・笑っていない)の2要因分散分析を行った。まず、拒否感受性の要因を「低群」に固定して分析を行った。その結果、交互作用は有意ではなかったが、周囲の友人の反応について主効果が有意となった ( $F(1,409)=12.40, p<.01$ )。すなわち、周囲が笑っている場合 ( $M=3.21$ ) の方が笑っていない場合 ( $M=2.89$ ) よりも得点が有意に高かった。

同様に、拒否感受性の要因を「高群」に固定し、話し手との関係性(親友・そこそこ親しい友人)×周囲の友人

の反応(笑っている・笑っていない)という2要因の分散分析を行った(Figure 1)。その結果、交互作用が有意となった ( $F(1,409)=12.84, p<.01$ )。単純主効果検定の結果、親友が冗談を言った状況に関して、周りの友人が笑っていない場合 ( $M=2.58$ ) よりも、笑っている場合 ( $M=3.46$ ) の方が迎合的反応の得点が有意に高かった ( $F(1,409)=29.05, p<.01$ )。また、周囲の友人が笑っていない状況に関して、そこそこ親しい友人 ( $M=3.08$ ) よりも、親友 ( $M=2.58$ ) に対する迎合的反応の得点が有意に低かった ( $F(1,409)=9.65, p<.01$ )。

最後に、話し手との関係性の要因を「親友」水準に固定し、周囲の友人の反応(笑っている・笑っていない)×拒否感受性(低群・高群)の2要因分散分析を行った結果、交互作用が有意となった ( $F(1,409)=5.70, p<.05$ )。単純主効果検定の結果より、周囲の友人が笑っていない場合において、親友に対する迎合的反応の得点は、拒否感受性高群 ( $M=2.58$ ) よりも低群 ( $M=2.95$ ) のほうが高いことが示された ( $F(1,409)=5.63, p<.05$ )。

**回避的反応** 回避的反応の得点を従属変数として、拒否感受性の程度(低群・高群)×話し手との関係性(親友・そこそこ親しい友人)×周囲の友人の反応(笑っている・笑っていない)の3要因分散分析を行った結果、有意な2次の交互作用はみられず、話し手との関係性と拒否感受性の要因間において有意な1次の交互作用 ( $F(1,409)=6.49, p<.05$ ) がみられた (Table 4, Figure 2)。単純主効果検定の結果、拒否感受性の低群は、そこそこ親

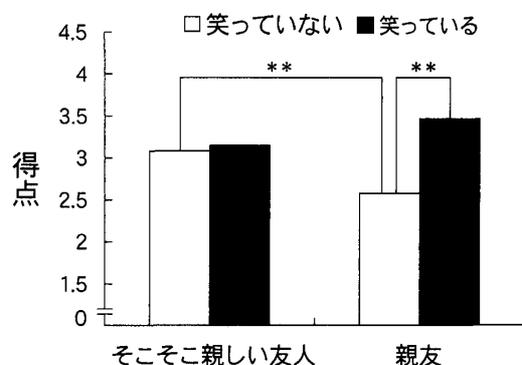
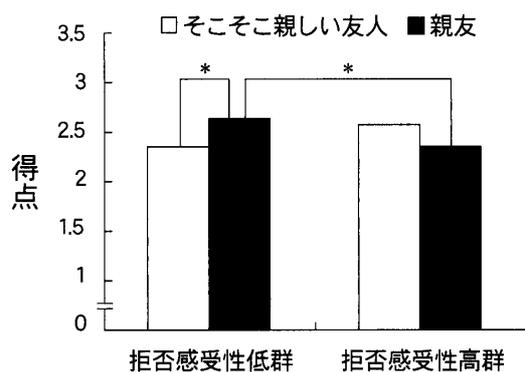


Figure 1 拒否感受性高群における迎合的反応の得点  
注) \*\* $p<.01$



**Figure 2** 拒否感受性低高群ごとの回避的反応の得点  
注) \* $p < .05$

しい友人 ( $M=2.31$ ) よりも親友 ( $M=2.60$ ) に対して回避的  
的反応を行うことが示された ( $F(1, 409)=4.58, p < .05$ )。  
また、拒否感受性低群 ( $M=2.60$ ) は、拒否感受性高群  
( $M=2.32$ ) よりも親友に対して回避的反応をすることが  
示された ( $F(1, 409)=3.91, p < .05$ )。

**感情表出反応** 感情表出反応の得点を従属変数とし  
て、拒否感受性の程度 (低群・高群) × 話し手との関係性  
(親友・そこそこ親しい友人) × 周囲の友人の反応 (笑ってい  
る・笑っていない) の 3 要因分散分析を行った (Table  
4)。その結果、話し手との関係性と周囲の友人の反応の  
主効果がそれぞれ有意となった ( $F(1, 409)=8.57, 17.65$ ,  
共に  $p < .01$ )。これは、そこそこ親しい友人 ( $M=2.12$ ) より  
も親友 ( $M=2.36$ ) に対して感情表出反応を行い、周囲  
の友人が笑っている状況 ( $M=2.06$ ) よりも笑っていない  
状況 ( $M=2.42$ ) において感情表出反応を行うことを示し  
ている。

## 考 察

本研究の目的は、友人に言われた冗談に対して怒り  
を感じるという感情喚起場面において、聞き手の反応  
がパーソナリティ要因と状況要因によって、どのよう  
に規定されるかを場面想定法を用いて検討することで  
あった。

冗談に対する反応としては、Laudau et al. (2001)  
に基づき、「迎合的反応」、「回避的反応」、「感情表出反  
応」を想定したところ、想定どおり 3 因子が得られた。  
拒否感受性の低・高群それぞれにおいて同様の 3 因子  
が得られたが、下位尺度得点の相関に相違がみられた。  
たとえば、拒否感受性の低群においては、回避的反応  
と感情表出反応との間に正の相関 ( $r=.30$ ) がみられた  
一方、拒否感受性の高群においては、無相関 ( $r=.09$ )  
であった。本研究を行うにあたり、回避的反応は中立

的な反応と位置づけたが、拒否感受性の低群に含ま  
れる回答者は、当該反応を感情表出反応に近いものとし  
て捉えた可能性が高い。すなわち、拒否感受性が低い  
個人は、友人との会話場面において回避的反応を行う  
ことは、不快感や怒りを示す一種の感情表出であると  
捉えていると考えられる。

周囲の友人の反応の主効果に関する仮説 1 および仮  
説 2 について、以下に考察を行う。迎合的反応を従属  
変数とした 3 要因分散分析において、周囲の反応の主  
効果が有意となり、笑っていない場合よりも笑ってい  
る場合の方が迎合的反応の得点が高かった。同様の主  
効果は、拒否感受性の要因の水準を低群、高群にそれ  
ぞれ固定した分析においても不変であった。以上より、  
仮説 1 が支持された。また、感情表出反応に関しても、  
3 要因分散分析の結果、主効果が 1% 水準で有意と  
なった。以上より、笑っていない場合よりも笑ってい  
る場合の方が感情表出反応の得点が少ないという仮説  
2 は支持されたと結論付けられる。

これらの結果により、井上 (2008) が指摘したよう  
に周囲の他者の要因を取り上げることの有効性が示され、  
冗談を言われる場面においては Martin (2007) の知見と  
一致して、周囲の友人の笑いが冗談に対する反応を左  
右する重要な要因であることが明らかとなった。特に、  
迎合的反応に関しては拒否感受性の高低にかかわらず  
主効果がみられた点により、周囲の他者の笑いの効果  
が非常に頑健であることを示しているといえよう。

次に、話し手との関係性の要因の効果に関する仮説  
3 および仮説 4 について、以下に考察を行う。感情表  
出反応に関しては、3 要因の分散分析において主効果  
が 1% 水準で有意となり、そこそこ親しい友人よりも  
親友に対して感情表出反応を行うことが示された。以  
上より、仮説 3 は支持された。感情を明確に伝えると  
いう行動が特に親しい友人に行われるという結果は、  
Ickes & Duck (2000) の知見と一致し、友人との心的  
距離が感情表出において重要であることを示唆してい  
るといえよう。この点は、木野 (2000) や吉田・高井 (2008)  
の結果とも整合している。以上のように、こうした状  
況変数が冗談を言われた場面においても着目すべき状  
況要因であることが明らかとなった点は、本研究の意  
義のひとつと言ってよいだろう。

一方、迎合的反応については 3 要因分散分析におい  
ても主効果は有意にならず、拒否感受性低・高群ど  
ちらにおいても主効果は有意とはならなかった。これら  
の結果より、仮説 4 は支持されなかった。拒否感受性  
高群においては、交互作用が有意となったため、交互

作用により主効果がみられなかった点を考慮すべきであるが、交互作用のみられなかった低群においては予測と異なる結果であった。この点に関しては、拒否感受性が低い個人は、本研究で想定しなかった動機によって迎合的反応を行っている可能性が考えられる。たとえば、崔・新井 (1999) は、感情表出の制御に関して、自己保護的動機に加えて相手への考慮といった向社会的動機が存在を指摘している。すなわち、拒否感受性の低群は、向社会的動機に基づき、周囲の友人が冗談に笑わないという話し手の立場が悪化する状況において、話し手である親友に配慮した反応を選択している可能性が考えられる。拒否感受性が低い個人が、どのような動機を有するかは、今後さらに検討する必要があるだろう。

次に、仮説5および仮説6に関して、以下に考察を行う。拒否感受性高群の迎合的反応に関しては、交互作用が有意となった。周囲の友人が笑っていない場合においては、そこそ親しい友人よりも親友に対して迎合的な反応を行わない一方、周囲の友人が笑っている状況においては、迎合的反応の得点に差が見られないことが示され、予測されたパターンと一致している。また、親友が冗談を言って周囲の友人が笑っている状況の方が笑っていない状況よりも有意に得点が高いことが示された。これらの結果は、仮説5を支持する。

この結果は、拒否感受性の高い個人の特徴である、「他者から拒否されることを避ける」という自己防衛的な反応の観点 (Downey & Feldman, 1996) から考察できる。すなわち、拒否感受性の高い個人は、周囲の友人と冗談の話し手という2つの対象から拒否されるかどうかを考慮し、そうした対象から拒否されたり、脅威を受けたりしないよう、状況に合わせて自己防衛的な反応を選択すると考えられる。すなわち、拒否感受性が高い個人にとって、話し手が親友であり、かつ周りが笑っていない場面は、迎合的反応をしなくても話し手や周囲の友人のどちらからも拒否される恐れが無いと判断される場面であり、迎合的反応が選択されなかったと考えられる。

こうした考察は、話し手がそこそ親しい友人である場合、迎合的反応の得点は周囲の友人の反応にかかわらず、ほぼ同程度の高さを示している点からも支持される。これは拒否感受性の高い個人は、話し手であるそこそ親しい友人から拒否されることを懸念するため、周囲の友人の反応に左右されなかったものと考えられる。上記の結果は、拒否感受性の低群においてはみられず、拒否感受性高群に特有のものであり、En-

dler & Magnusson (1976) や Krahé (1992 堀毛訳 1996) の論じた、状況の心理的な意味づけによって行動が規定されるという知見との一致を示唆する結果であると考えられる。

拒否感受性高群の感情表出反応に関しては、交互作用は有意とならず、予測されたパターンと一致しないため、仮説6は支持されなかった。しかしながら、交互作用は有意ではなかったものの、周囲の友人が笑っている場合は、親友とそこそ親しい友人間で得点に違いが少なく、周囲の友人が笑っていない場合は、親友に対して得点が高いという結果が得られた。こうした全体的なデータの傾向は、仮説6と非常に似ているといえる。こうした点から、より精緻化された手法を用いることによって、仮説を支持する結果を得られる可能性が残されていると考えられる。さらなる検討が必要だろう。

さらに、本研究で仮説を立てなかった回避的反応に関する結果について以下に述べる。拒否感受性の低群は、そこそ親しい友人よりも親友に対して回避的反応を行い、さらに、拒否感受性低群は、拒否感受性高群よりも親友に対して回避的反応をすることが示された。拒否感受性の低群においては、感情表出反応と似た傾向を示している。下位尺度間の相関を算出した結果においても、回避的反応は感情表出反応と中程度の正の相関を示しており、感情表出反応と類似の反応と取られている可能性が高い。つまり、拒否感受性低群においては、回避的反応は感情表出反応に近い反応として位置づけられ、親友に対して会話の成立を拒否するという間接的な意思表示として捉えられたため、親友に対してより多くなったのではないかと考えられる。一方、拒否感受性高群は、明確な意思表示をしないという防衛的な反応として回避的反応を位置づけており、親友に対しては防衛的な反応をしないと考えられる。拒否感受性の低・高群によって、回避的反応の捉え方に差異があり、特定の状況による反応の仕方に違いがみられるという上記の結果を考慮すると、パーソナリティ特性による状況の意味づけの相違だけでなく、自身の行動自体の意味づけの相違も今後頭頭に置いて研究を行う必要があるかもしれない。

本研究で得られた結果は、友人間における冗談に関して、いくつかの示唆を与えるものである。1点目として、拒否感受性が高い個人は、自己防衛的な動機を持つため、怒りを感じた場面であっても、迎合的反応を行う傾向があることが明らかとなった点である。2点目として、周囲の友人が冗談に笑っている場合、両群

において、迎合的反応が多く、感情表出反応が少ないという結果が共通して得られた。こうした点より聞き手が笑いを表出していたり、特に怒り感情を感じているように見えなくても、拒否感受性や、周囲の友人の反応の効果を考慮し、聞き手の感情を適切に読み取っていくことが望まれる。特に、身体的特徴や悩みといった話題に関するからかいや冗談は、聞き手に怒りを感じさせやすいため（葉山・櫻井, 2008 ; Kruger et al., 2006), こうした冗談を言う際には、聞き手の反応についてより注意が必要だろう。

最後に、本研究に残されたいくつかの課題について述べる。1つ目は、本研究ではパーソナリティ要因を拒否感受性に限定している点である。拒否感受性自体は有用な変数である一方、冗談に対する反応を自己呈示と捉えるならば、今後は自己モニタリングといった変数も取り上げる必要がある。また、向社会的な動機については愛他性などの関連を検討する必要がある。たとえば、崔・新井 (1999) の作成した感情表出の制御尺度と冗談に対する反応の関連を検討することが有効だろう。

2つ目は、冗談の内容の要因を研究に導入しなかった点である。怒りを感じさせる冗談には性的な冗談や身体的特徴に関する冗談など様々な内容の冗談が指摘されているため（葉山・櫻井, 2008), 今後は、冗談の内容を考慮する必要があるだろう。

3点目は、本研究において聞き手の怒りの強さが考慮されていない点である。感情表出に関する先行研究（Gross, John, & Richards, 2000 ; 宮下・森崎, 2004) においてはしばしば取り上げられる変数であり、今後発展的な研究を行う際は研究に取り入れる必要がある。たとえば、上述の冗談の内容と併せて、その冗談に対してどの程度怒りを感じるかを尋ねることで、より幅広い検討が可能になる。

以上の課題は残されているものの、本研究は、友人間から言われた冗談に怒りを感じた際の聞き手の反応の規定因に関して、一定の知見を提出したという点で意義があると考えられる。特に、拒否感受性の高い個人が有する自己防衛的な反応傾向を支持する結果を得た点や、周囲の友人の反応という第三者の反応が重要な規定因であることを示唆した点で、本論文は発展性を有すると考えられる。

## 引用文献

- Chapman, A. J. (1973). Social facilitation of laughter in children. *Journal of Experimental Social Psychology*, *9*, 528-541.
- 崔 京姫・新井邦二郎 (1998). ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係. *教育心理学研究*, *46*, 432-441. (Choi, K., & Arai, K. (1998). Relationship between regulation of negative emotional expression, satisfaction of friendship, and mental health. *Japanese Journal of Educational Psychology*, *46*, 432-441.)
- 崔 京姫・新井邦二郎 (1999). 新版感情表出の制御尺度の作成. *筑波大学心理学研究*, *21*, 89-97. (Choi, K., & Arai, K. (1999). A study of the new Regulation of Emotional Expression (REE) Scale for adolescence. *Tsukuba Psychological Research*, *21*, 89-97.)
- 崔 京姫・新井邦二郎 (2000). 感情表出の制御と親和動機及びシャイネスの関連について. *筑波大学心理学研究*, *22*, 161-166. (Choi, K., & Arai, K. (2000). A study of the relationship between Regulation of Emotional Expression (REE), interpersonal orientation, and shyness. *Tsukuba Psychological Research*, *22*, 161-166.)
- Downey, G., & Feldman, S. I. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*, 1327-1343.
- Downey, G., Freitas, A. L., Michaelis, B., & Khouri, H. (1998). The self-fulfilling prophecy in close relationships : Rejection sensitivity and rejection by romantic partners. *Journal of Personality and Social Psychology*, *75*, 545-560.
- Endler, N. S., & Magnusson, D. (1976). *Interactional psychology and personality*. Washington, DC : Hemisphere Publishing.
- Gross, J. J. (2001). Emotion regulation in adulthood : Timing is everything. *Current Directions in Psychological Science*, *10*, 214-219.
- Gross, J. J., & John, O. P. (1997). Revealing feelings : Facets of emotional expressivity in self-reports, peer ratings, and behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, *72*, 435-448.
- Gross, J. J., & John, O. P. (2003). Individual differences in two emotion regulation processes : Implications for affect, relationships, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 348-362.

- Gross, J. J., John, O. P., & Richards, J. M. (2000). The dissociation of emotion expression from emotion experience : A personality perspective. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 712-726.
- Harper, M. S., Dickson, J. W., & Welsh, D. P. (2006). Self-silencing and rejection sensitivity in adolescent romantic relationships. *Journal of Youth and Adolescence*, **35**, 459-467.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2008). 過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待の形成プロセスの検討 教育心理学研究, **56**, 523-533. (Hayama, D., & Sakurai, S. (2008). Extreme jokes : Process by which speakers form expectations of communicating benign intentions. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **56**, 523-533.)
- 本多潤子・桜井茂男 (2000). 日本語版拒否感受性測定尺度の作成 筑波大学心理学研究, **22**, 175-182. (Honda, J., & Sakurai, S. (2000). Development of Japanese version of Rejection Sensitivity Questionnaire. *Tsukuba Psychological Research*, **22**, 175-182.)
- Ickes, W., & Duck, S. (Eds.) (2000). *The social psychology of personal relationships*. Chichester, UK : Wiley.
- 井上 弥 (2008). 感情表出の偽装経験からみた感情の特性 感情心理学研究, **15**, 71-79. (Inoue, Y. (2008). Emotional features based on experiences of the falsifying of emotions. *Japanese Journal of Research on Emotions*, **15**, 71-79.)
- Jack, D. C. (1991). *Silencing the self : Women and depression*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- 木野和代 (2000). 日本人の怒りの表出方法とその対人的影響 心理学研究, **70**, 494-502. (Kino, K. (2000). Japanese anger expression styles and their interpersonal influence. *Japanese Journal of Psychology*, **70**, 494-502.)
- Krahé, B. (1992). *Personality and social psychology*. London : Sage. (堀毛一也 (編訳) (1996). 社会的状況とパーソナリティ, 北大路書房)
- Kruger, J., Gordon, C. L., & Kuban, J. (2006). Intentions in teasing : When “just kidding” isn’t good enough. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 412-425.
- Lampert, M. D., & Ervin-Tripp, S. M. (2006). Risky laughter : Teasing and self-directed joking among male and female friends. *Journal of Pragmatics*, **38**, 51-72.
- Laudau, S., Milich, R., Harris, M. J., & Larson, S. E. (2001). “You really don’t know how much it hurts :” Children’s and preservice teachers’ reactions to childhood teasing. *School Psychology Review*, **30**, 329-343.
- Martin, G. N., & Gray, C. D. (1996). The effects of audience laughter on men’s and women’s responses to humor. *Journal of Social Psychology*, **136**, 221-231.
- Martin, R. A. (2007). *The psychology of humor : Integrative approach*. London : Elsevier Academic Press.
- Mischel, W. (1968). *Personality and assessment*. New York : Wiley. (詫摩武俊 (監訳) (1992). パーソナリティの理論 誠信書房)
- 宮下敏恵・森崎竜亮 (2004). 怒り感情の表出制御と精神的健康及び対人不安との関係 上越教育大学研究紀要, **23**, 487-499. (Miyashita, T., & Morisaki, R. (2004). Relationship among regulation of anger expression, mental health and social anxiety. *Bulletin of Joetsu University of Education*, **23**, 487-499.)
- 中村 真 (1994). 日本人学生の表示・解読規則—嫌悪と悲しみの比較文化的考察— 宇都宮大学教養部研究報告 第2部, 15-34. (Nakamura, M. (1994). Display/decoding rules of Japanese studies : A cross-cultural analysis of disgust and sadness. *Bulletin of the Faculty of General Education*, **2**, 15-34.)
- Scambler, D. J., Harris, M. J., & Milich, R. (1998). Sticks and stones : Evaluations of responses to childhood teasing. *Social Development*, **7**, 234-249.
- 新村 出 (編) (1998). 広辞苑 第5版 岩波書店 (Shinmura, I.)
- 吉田琢哉・高井次郎 (2008). 怒り感情の制御に関する調整要因の検討：感情生起対象との関係性に着目して 感情心理学研究, **15**, 89-106. (Yoshida, T., & Takai, Z. (2008). Moderating factors of anger regulation : Focusing on interpersonal relationships with the agent of arousal. *Japanese*

- Journal of Research on Emotions*, **15**, 89-116.) (1995). ユーモアの心理学 大修館)  
 Ziv, A. (1984). *Personality and sense of humor*. (2009.5.14 受稿, '10.5.15 受理)  
 New York : Springer. (ジップ, A. 高下保幸 (訳)

## *Rejection Sensitivity and Situational Factors as Determinants of Listeners' Reactions to Aversive Jokes*

DAICHI HAYAMA (JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE, UNIVERSITY OF TSUKUBA) AND SHIGEO SAKURAI (GRADUATE SCHOOL OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCE, UNIVERSITY OF TSUKUBA) *JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 2010, 58, 393-403

The purpose of the present study was to examine a personality factor (Rejection Sensitivity : RS) and situational factors (e.g., the relation between the speaker and the listener, and reactions of surrounding friends) as determinants of listeners' reactions to aversive jokes. In the present study, listeners' reactions included compliant reactions, avoidant reactions, and emotionally expressive reactions. University students (169 men, 247 women, 1 person gender not reported) were randomly assigned to 1 of 4 specific situations, such as one in which the listener's best friend is the speaker, and surrounding friends laugh at the joke. The participants were then asked to estimate the frequency of their reactions to aversive jokes in the situation to which they had been assigned. A 3-factor ANOVA mainly showed that participants who were high on rejection sensitivity estimated a low frequency of complaint reactions in situations in which their best friend was the speaker and surrounding friends did not laugh at the joke, whereas those participants estimated a high frequency of compliant reactions in situations in which their best friend was the speaker and surrounding friends did laugh. These results indicate that the participants high on rejection sensitivity assessed the possibility of rejection in each situation and selected their reaction in relation to self-protection.

Key Words : rejection sensitivity, reactions to jokes, emotional expression, anger, situational factors